

変わる日本人の死生観

「千の風」に委ねて 先祖を祀る気風薄れる

慶応義塾百五十年記念事業の一端「復活―慶応義塾の名講義」で『いのち』と『こころ』一死を見つめて今を生きる」と題する講義を行なった。それを取材された『中外日報』から表記の題の寄稿を求められた。そこで以下に伝統的な死生観、葬儀、墓地と現代におけるこれらの変容、その社会的背景、両者に通底する死生観について記すことにしたい。

古来日本人は死霊の赴く他界は里近くの山や海にあると考えた。

最近、新聞の死亡欄や「惜別」の記事に目をとめるようになった。七十歳半は近くなつて死を見つめながら日々を送っていることによるのかも知れない。そんなこともあって、去年十月二十七日、葬儀や供養を受けら

れなかつたり、自殺、殺人などで不慮の死をとげた人は怨霊となつて生者に祟りをもたらすと恐れられた。

過疎化と少子高齢化で 社会状況に大きな変化

この死生観を支えたの存続が何よりも必要と伴う村落の過疎化、少子高齢化によって社会状況が大きく変化した。特に現在は過疎に加えて、老人のみの限界集落が激増している。また自然破壊や温暖化によって地球すらもが限界に近づいている。そこで以下これらがもたらした死生観や葬儀・墓の変化を取り上げることにする。

「共同墓」と「ビハーラ」

まず、かつて理想とされた自宅で家族にみとられた自宅を組織した「もやいの会」がある。八割以上が病院死で、自宅ではあつてもみとの人もいない孤独死も少なくない。それに加えて戦争のために配偶者が得られなかつたり、未亡人となつた女性たちが現在死を迎えている。夫に先立たれて一人とり残された女性も多し。

死に至る病で入院したとしても、孤独な中で死の不安に脅えている人も少なくない。こうした人々を救済する試みの一として、

まず、かつて理想とされた自宅を組織した「もやいの会」がある。八割以上が病院死で、自宅ではあつてもみとの人もいない孤独死も少なくない。それに加えて戦争のために配偶者が得られなかつたり、未亡人となつた女性たちが現在死を迎えている。夫に先立たれて一人とり残された女性も多し。

入院後、死の床にある患者の心を癒やし、最後の生を充実させる目的のケアには、ホスピスとビハーラがある。ホスピスは一九六七年にロンドン郊外のセント・クリストファー・ホスピスで始まった。日本では一九八一年に浜松の聖隷三方原病院が最初で、二〇〇六年五月現在で全国に百五十七のホスピスがある。

宮家 準

慶応義塾大学名誉教授
みやけ ひとし氏 昭 研究科博士課程修了(文学和八年、東京生まれ。東 博士)。慶応義塾大学文学部教授、国学院大学文学部教授、同大学院文学部教授、同大学院賞、福澤賞、秩父宮記念文学研究科講師を歴任。学術賞(日本学術振興会)現在、日本学術会議連携員(哲学・倫理・宗教教育分科会委員長)、日本山岳修験学会会長。日本宗教学会賞、慶応義塾山と日本人」など。

「散骨」や「樹木葬」も

死者の意見を尊重して

◇ 〆 〆 〆 〆 (三三・三%)、天国・極楽三百二十五人(二七・七%)となつている。この葬儀は死者の意見に従うが九三%を占めることを反映するかのようである。散骨は自然保護の観点から、先づ死者の意見に従うが千三百五人(九三%)、先祖祭祀を子孫の義務とする者が千二百三十六人(八八・一%)、葬儀の意味は死者を他界に送る五百三十五人(三三・三%)、死者との別れを五九人(三六・六%)、死者を偲ぶ二百四十一人(二七・三%)、

密葬のあとで「偲ぶ会」に集う

以上、伝統的な死生観に基づき、現在のものを紹介した。そこで最後に、この間大きな変化とその意味を検討したい。まず葬儀は主体が家から個人に変わり、その運営も葬式組から葬儀社にわたつていった。そして、かつての葬儀は位牌・引違と死霊を他界に送る葬列が重視されたが、現在は遺影や帛辞に重点が移っている。また身内で密葬がなされた後、死者が木葬や「千の風」の歌の形がとられていたり、すなわち死者の霊魂は残されたい人の心の中に宿るとして、手元供養など形をかえた遺骨の存続。さらには遺伝子の承継が信じられ、そこに安らぎが得られているのである。



現代の死生観を説く宮家名誉教授

料宿泊施設に淵源があるという。病院でのホスピスは看護教育を受けた者がチームを組んで患者を親切にもてなし、病状と悩みを知り、その個性を尊重して精神的な支えとなることを目的としている。

ビハーラは遊歩、僧院を意味するサンスクリットで、日本では新潟で田宮仁氏によって始められた。その目的は共感的な対話によって患者と苦悩を分かちあい、全人的なケアを通して生きる意味を与えようとするというものである。

この両者は不治の病によって、ともすれば自暴自棄になりがちな患者に一生をふり返らせて、真の自己に目覚めさせるもので、仏教でいう「如実知自身」の境地、アイデンティティを確立させる営みともいえるものである。

のうちに汚職は自己の潔白をあかし、組織防衛のためである。また破産やリストラ、いじめはこうした状況に追いやられた者への死による報復で、怨霊の祟りに似ている。もっとも、安易に自殺に走るのには、心の奥底に再生の信仰があるのかもしれない。いずれにしても、これらでは現世よりも来世での再生が重視されている。

◇ 〆 〆 〆 〆